

## 芸術家

滋賀大学経済学部 近藤 豊将

文学エッセイと並んで写真が趣味となってきた。彦根城や琵琶湖の四季折々の姿を記録しているのだ。その成果は、インターネットなどを通じて、幾種類かの形態で公表している。

自慢に聞こえるかもしれないが、最近、私が撮った写真を何人かの方々から褒めていただいた。プロの作品かと思っていたら、私の手になるものと知って、皆一様に仰天ぎょうてんしておられたのだ。

だが、これは驚くべきことではない。学術研究、文学、写真、絵画など **“芸術”** と呼ばれる領域には共通の神髓コッがあり、例

えば文学エッセイを通じてその神髓えとくを会得したものは、写真や絵画においてもそれを縦横無尽じゅうおうむじんに応用できるからだ。以下、読者ファンのために、その神髓のいくつかを惜しみなく開陳しよう。

一・題材の選択 潜在的に美しい対象を選択することはもちろん大切である。だがそれだけではなく、自分が最も能力を発揮できる題材かどうかを重要視すべきだ。優れた素材ではあっても、

それに魂いのちを吹き込むのは、芸術家本人だからである。また、鑑賞者をして自然に美を感じせしめるためには、格式の高さも同時に求められることは言うまでもなからう。

二・全体の構成 全体の中に個々の事物をいかに配置するか、特に留意せよ。写真や絵画であれば、周辺の要素を効果的に使って、主対象を引き立たせるのだ。

三・細部へのこだわり 細部といえども、粗雑であってはならぬ。全体は細部の集積なので、積み重なると全景を損なうことになるからだ。

四・執着心 最後になるが、最良の題材を探求し、全体と細部の有機的な融合のために、思考と試行を続ける執着心こそが、最も大切であろう。これを欠いては、いかなる才能も実を結ぶことはない。

決して、褒めてもらったことで囿こに乗っているわけではない。芸術の普及のためには、鑑賞する側にもその勘所を分かっていただくことがどうしても必要なのだ。それを伝える努力を怠ると、芸術が衰退してしまうのではないか。私としては、美を紡つむぐ一人の芸術家として、その普及のために天命を全まうしたいだけなのである。

(平成二十五年四月十三日)

※ゆでたまご先生、ごめんなさい。

